



小田 基

二〇年代・パリ

あの作家たちの青春

研究社出版



日文 701450234

97357

小田基

二〇年代・パリ

あの作家たちの青春



研究社出版

プロローグ——宿命の、あのいくつかの出会いが……

✧ ≪二〇年代・パリ≫の始まりには、二つの二つながらの移動があった 四 A・モニエのすずめでできたシルヴィアの「シェイクスピア書店」は、≪二〇年代・パリ≫の舞台を用意した 一三

第1章 二〇年代前夜——大西洋の向こう側

✧ ≪二〇年代・パリ≫の人生模様を織りなすのは、大西洋の向こう側からの渡り鳥たちであった 三二 自由の女神は自由の灯を高くかかげながら、むせび泣き、身をもだえた 四三

第2章 前衛の旗手たち、パリに集う

✧ 新人発掘の名手、エズラ・パウンドに声をかけられたジョイスは、そのとき、渡すべき原稿を持っていなかった 五八 『エゴイスト』誌の編集長、ウィーヴァ女史は、パウンドとともにジョイスの船出に手をかした 六六 エグザイルの代表選手、ジョイスは、かきなる放浪の旅のなかで、なぜかパリを目指さなかった 七四 シルミオーネの会見で、パウンドは、故郷に帰るというジョイスに数日間のパリ滞在をすすめた 八三 数日間の滞在の予定を、二〇年間の永住に変えさせた何かが、パリにはあった 九一

第3章 シェイクスピア書店、賑わう

✧ ジッドにスタインに、アメリカからはアンダスンと——来訪者の顔ぶれはゆたかだった

九九 シルヴィアは、ジョイスに引き合わされようとして、こわくて逃げ出したくなった
一一三 エリオットとウインダム・ルイスが、パウンドから預ってきた包みのなかみは中古の靴であった 一二〇 パリ群像の多様な動きのなかで、やがて『ユリシーズ』出版の日が近づこうとしていた 一三一

第4章 リトル・マガジンと編集者たち

☆ 『リトル・レビュー』の勇敢なる編集長、アングラス女史は、『ユリシーズ』の連載に乗りだした 一四四 『ユリシーズ』、ワイセツ文書として起訴される——グリニッジ・ヴィレッツの住民が法廷を埋めた 一五〇 こちらはパリ、そしてもうひとつの出会いが——ラルボーは病氣見舞いに『ユリシーズ』という花束を贈られた 一五九 シルヴィアは、モニエに励まされ、またラルボーに支えられながら、途方もない大冒険に船出した 一六六 バーナード・ショアの『ユリシーズ』講読予約拒否に、パウンドは、怒り心頭に発した 一七八
デイジョンの印刷者、ダランティエールは、ジョイスの常識はずれの校正に泣いた 一八四
ブルーストとジョイスは同席の機会を持ったが、その座談は、まったくのすれ違いであった 一九〇 イエスそしてあのひとのしんどうはきちがいみたいになくなってそしてイエスわたしはいつたわイエスいいわよイエス 一九七 発刊を目前にすることができた『ユリシーズ』のための夕の会場、モニエ書店は超満員であった 二〇三 『ユリシーズ』の最初期評価は、とんちんかんの展覧会であった 二一三

第5章 「ロスト・ジェネレーション」

☆ 「ロスト・ジェネレーション」——あの耳なれた言葉は、こうしてひろまった 二三二
ヘミングウェイの旅立ち——アングラスは、紹介状に、「二二歳の無名の青年」とは書かなか

った 二四三 「移動祝祭日」——おお姐御スタインは、青年ヘミングウェイに懷を開いてくれた 二四九 「パウンドはぼくに書くことを教え、ぼくは彼にボクシングを教えている」 二六二 「コンタクト」出版社と「スリー・マウンテンズ」社の誕生、そして『リトル・レヴュー』は「エグザイル特集号」を 二七〇 『トランスアトランティック』の創刊が、ヘミングウェイのパリ第Ⅱ期を待ち受けた 二八一 ゼルダ、スコット・フィッツジェラルド、花のシャンゼリゼを闊歩する 二九一 ディンゴ酒場の出会いはすばらしかった——先輩スコットは青年アーネストを絶賛した 三〇一 「この小説をハドリーとジョン・ハドリー・ニカナーに捧げる」——ヘミングウェイ『日はまた昇る』 三二四 華のパリに苦い、苦い恋の花が咲き、やがてふくらみ始めたが—— 三三〇 あの人と会わずに一〇〇日経ってなお愛が続いていたなら、私は身を引くわ 三三六

第6章 エグザイルたち、パリを離れる

♡ オデオン通りの賑わいは続いていた、しかし……シルヴィアの胸のうちは…… 三三四 海賊業ロスの掠奪行為に、一六七人の世界中の文化人が立ち上がった 三四四 『トランジション』は、二〇年代を飾る真のビッグ「リトル・マガジン」であった 三五六 来る人、行く人、帰る人、そして残る人——すべての人にとってパリは永遠の地となった 三六九

エピローグ——ラ・セーヌは流れる

♡ 「時とはひとつの暴虐だ、いずればつきり斬らねばならぬ」——「自殺のこだま」が繰り返す 三八六 シルヴィアのつぶやき——そして、パリの空の下、ラ・セーヌは流れる 三九六

二〇年代・パリ

——あの作家たちの青春

同僚に、そして

妻と、子供たちに

プロローグ——宿命の、あのいくつかの出会いが……

☆ 二〇年代・パリミの始まりには

二つの二つながらの移動があった

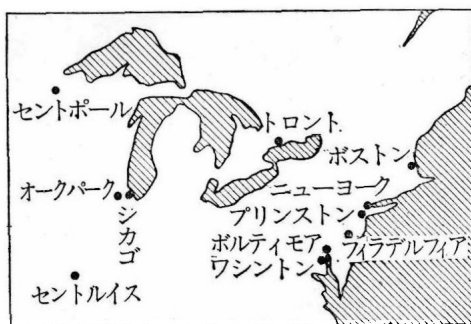
一九一九年一月——。それは一九二〇年代の前夜とも呼べるものだった。この時に、二〇年代・パリミというドラマの主役をとともに演じることになる二人の人物が、それぞれの移動を始めていたのだ。

一人はパリに定着することによって、二〇年代の準備を整える。一人はそれまでの長いエグザイルの旅の継続のなかにいる。そしてパリ定住の一つ手前の地点へと移動して来る。

一人は女性、一人は男性である。パリは二人のいずれにとつても、外つ国であった。それはこれから眺めようとしているたぐさんの人物にとってそうであるように。

女性メリーランド州の海港、ボルティモア生まれのアメリカ人であり、男性はアイルランドのダブリン市の生まれであった。

アメリカ娘のシルヴィアは、パリに行きそして住むための、はっきりした目標を持っていたといえる。とはいえ、それは、幼少のころからの夢といったぐいのものではなかった。目標が決まるまでには数多くの「旅」があり、また多くの人々との「出会い」があった。



アメリカ合衆国東・中西部

シルヴィアの父親は第一長老教会の牧師だった。プリンストン大学を卒業して最初の任地がボルティモアで、その後二、三の任地を回ってプリンストンに落ち着くことになる。

ニュージャージー州中部の大学町、プリンストンでの一家——「ビーチ家」——の住居は、「図書の広場」という場所にあった。この地名はシルヴィアにとっては思い出深いものになっていく。

プリンストン大学は名門として知られる。アメリカ中西部——つまり当時の郡部——の若者がプリンストンを目指すことはひとつの挑戦ともみられていた。実際、ミネソタ州セントポール出身の十七歳の若者、スコット・フィッツジェラルドが一九一三年にプリンストンにやって来たときには、自分を中西部からの挑戦者、それも誇り高き挑戦者と考えたのであった。

当時の学内の文芸雑誌『ナッソー文学』の編集長は、エドマンド・ウィルソン。ウィルソンはフィッツジェラルドの一年先輩であった。

一九一六年、シルヴィア・ビーチは、「図書の広場」のわが家からニューヨークに出かけている。彼女はニューヨークの書店を見て歩いた。書店の本場はやはりニューヨークであった。書籍販売店だけではなく、出版社もまた彼女の興味をひいた。

本屋さんというのは私にもやれる職業かしら、という考えがふとシルヴィアの頭の中をよぎった。偶然にも彼女はある出版社の



シルヴィア・ビーチ

前にいた。その経営者はヒューブシュといった。彼女の一種の職業相談に、ヒューブシュ氏は親切に応じてくれた。

「できますとも。しっかりやってください」とヒューブシュは励ました。そしてそのなかみには、不思議な強い因縁がすでに芽びいていた。

ついで、彼女はスペインで何か月かを過ごしたのち、翌一七年にパリに入る。パリは彼女にとっては初めての土地ではなかった。ちょうど、二〇世紀がその曙を迎えようとしていた年に、彼女は、やはり父親の任地のひとつとしてのパリ生活を体験する。一八八七年生まれの彼女の、一四歳ころからの数年間であった。

さて、一九一七年のパリ入りの時には、シルヴィアにはまだ、はつきりとした将来の設計ができ上がっていたとは言えない。

シルヴィアは、目に入る本屋、貸本屋にはかならず立ち寄った。入ってみて、それがポルノ専門店であることもままあった。もちろん彼女は文学が好きだった。系統立ったフランス文学の勉強をしたという気持もあった。だが、いまひとつ目標が定まらなかった。

「要は、私が好きだってことなのね、これだけは確実なことだ」と、彼女はつぶやいた。彼女の文学性——文学好み——はへ創るゝ方のそれではない。これもどうやらそのとおりらしかった。

ともあれ彼女は、彼女にとって最もすばらしい方向へと歩み始めようとしていた。

アイルランドの作家、ジェイムズ・ジョイスが、それまで長年の放浪の旅を続けながら、パリを指そうとしなかったのはいさか奇妙なことにも思える。

一八八二年生まれのジョイスには、すでに詩集ひとつ（『室内楽』）、短編集ひとつ（『ダブリンっ子』）、長編小説ひとつ（『若き日の芸術家の肖像』）、戯曲ひとつ（『エグザイルたち』）があった。そして『ユリシイズ』を執筆中（雑誌連載は一八年三月から）という、二〇世紀文学の巨星の出現という足固めを完成する地点まで進んで来ている。

ジョイスとシルヴィアの切っても切れない絆の結びつきはほどなく達成されるのだが、その因縁はすでに始まっていた。というのは、シルヴィアは前に見たように、一九一六年ころニューヨークのヒュープシュを訪ねていると回想しているが（それ以上の言及はない）、この時期には、ヒュープシュは、ジョイスの『肖像』の出版を、準備中であるか、もしくは完了しているのだ。

二人のあいだに、この小説の、そしてジョイスの話題はかわされなかっただろう。そう考えるのが当時の状況からいってむしろ自然である。ヒュープシュが初対面の女性に対して、ジョイスを話題にすることは、いさか特殊すぎたろうから。そしてまた、ヒュープシュと密接な関係を持つシャーウッド・アンダスンの名前も——おそらくは出なかった。

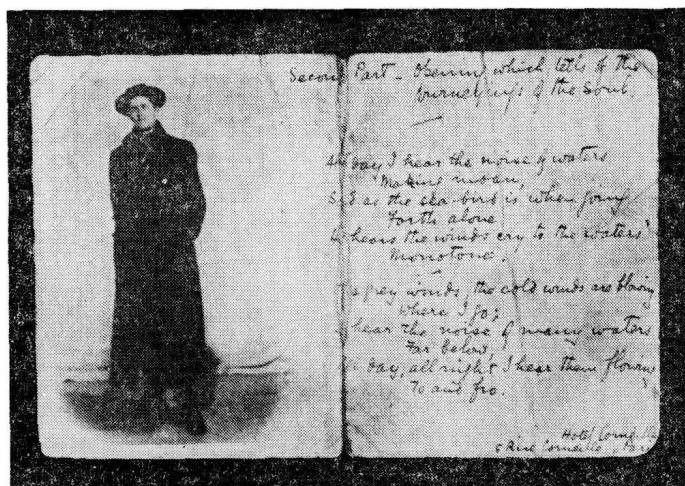
いずれであるにせよ、シルヴィアとジョイスは、間もなく、**二〇年代・パリ**を色あざやかに特徴づける画期的な結びつきを見せることになる。

二人の目に見えぬ絆はといえば、まだある。二〇世紀の曙の数年間のパリが、シルヴィアを迎えた時に、同時にジョイスをも迎えているからである。

一九〇二年、二〇歳のジェイムズは、ダブリン市の大学を卒業したあと、パリをめざすのだ。二月一日にダブリン市を発ち、途中ロンドンでは、W・B・イエイツと会い、さらにアーサー・シモンズにも引き会わされ、三日にパリに着いている。ついにながら、夏目漱石はこの一二月五日にアルバート・ドックからイギリスを離れ、帰国の途についている。

この時のジョイスのパリ行きの目的は、医学の勉強をするといういささか乱暴なものであった。学費の目当てもまったく立っていない。一二月のパリの寒空のもとをあてどなくさまよい、ついにたまらず二〇日後の二二日にはパリから逃げ出してしまふ。

年が明けて一月一七日に、ふたたびダブリン市をあとにして、パリに向かっている。今度は、態勢を整えて文学の勉強にじっくり腰を入れようとしてパリに乗



1902年、ジョイスがパリから送った写真つきののがき

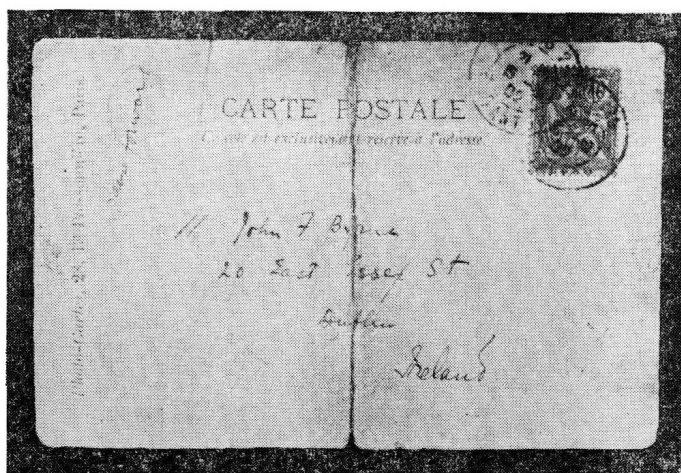
りこんだのである。ところが、四月一〇日、「ハハキトクスグカエレチチ」という電報に、急遽帰郷せざるを得なくなり、パリ遊学の計画は挫折してしまふ。

シルヴィアはその思い出の中で、モンマルトルの学生や画家のつどいとかムランルージュについて語っている。パリの街並みのどこかで彼女とジェイムズがすれ違った場面の想像は十分になし得ることである。

シルヴィアにはその後プリンストン時代があり、再度のパリ訪問の日を待つことになる。もともと、この間にも、フランスにはたびたび出かけている。彼女にとってフランスは、そしてパリは、ほとんど故郷にひとしく、夢と希望の、またそれが花開くはずの約束の土地でもあった。

一方ジョイスにとって、パリとは、若き日の挫折、痛恨の土地であったといえよう。『ユリシーズ』の中でステイーヴン・ディーダラスは、自嘲にみちてつぶやく――。

「おまえは飛んだ。どこへ？ ニューヘイヴン発、



前ページのはがきの表書き



ノーラ・ジョイス

ディエップ着。三等室客。パリ、そして帰郷。ラブウィングの鳥だ。イカルロス。『父よ、と彼は呼んだ。』波のしぶきに濡れて、落ちて、漂って。』

ジョイスは、ともあれ、アイルランド以外の場所に住まねばならなかった。アイルランドは世界の田舎だと彼がきめつけたからである。ロンドンには彼の考慮の中に入っていない。イギリスを越えてヨーロッパに、彼の目はあった。

「ヨーロッパ大陸が——」と、『肖像』の若いステイヴァン・デューダラスは、いまだ十分熟しきらない意識のかたちであこがれを洩らす。「——あのアイリッシュ海のかなたにひろがっている。未知の言葉をもち溪谷があり森林に囲まれ城砦をかまえ、そして、種々の民族が濠をかため、きちんと配置についているヨーロッパ大陸が。」

一九〇四年一〇月、ジョイスの放浪の旅は、愛人ノーラをともなつてダブリン市をあとにすること、始まった。将来の成算があつてのことではない。旅費はほとんど友人・知人からかき集めたもので、それすらどこまでの旅を確保できるものか知れなかった。彼の心の中には、エグザイルの試練をみずからに課するための、まず脱出をはかることだけがあつた。

その年の六月のある日にジョイスと初めて会つたノーラ——『ユリシーズ』の一日、「ブルームの日」(六月一六日)は二人のための日でもあつた——は、浮き浮きと、修学旅行に出かける女学生のよ

うであつたが——。

ちょうどこのころ、もうひとつの移動が、これは大西洋をアメリカからロンドンへ向かう、ジョン・ドス・パソスという八歳の少年の姿があつた。父親の信念からロンドン郊外の学校に入学させられたのである。これはすこし前の時期でいえば、ヘンリー・ジェイムズのようなエグザイルに成長する可能性があつた。だがドス・パソスはアメリカ人であることに強い執着を示した。彼はイギリスに強く反撥してほどなくアメリカに戻つた。この少年の場合は、のちに言われる「エグザイルの帰還」の最も初期の一例ということになるうか。

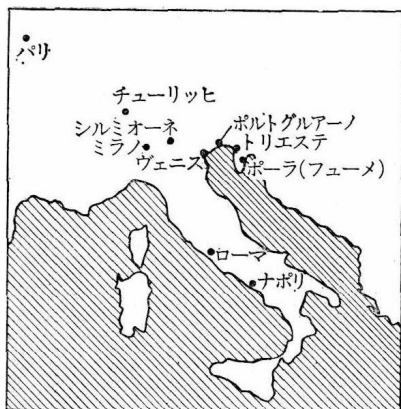
ジョイスは「帰還せざる」エグザイルとなる。同時に、しかし、アイルランド人であることをやめなかつた、アイルランド以外の土地にあり続けながら。

さてジョイスとノーラは、この時も、途中でパリに立ち寄っている。パリは、しかし、彼の目的地ではない。

チューリッヒ——ポーラ（フューメ）——トリエステ——ローマ——トリエステ——チューリッヒ、とジョイスとノーラの移動は続く。そして、いま眺めている離国からのちの十数年間に、ジョイスの帰郷は三度しかない。

そして、この三度目の帰郷は、アイルランドとのほとんど永久の訣別の原因を暗示するともみえる事件をとまなうものであつた。

シルヴィアがパリにやって来た一九一七年という年には、ジョイスはチューリッヒに来て（一五年六月）、二年が経過していた。



中央ヨーロッパ南部

チューリッヒの前はトリエステである。オーストリア領トリエステからスイスのチューリッヒに転住せねばならなかったのは第一次大戦のためであった。ジョイス自身が多うであったように、当時のチューリッヒは多くの亡命者がいたし、文学・芸術のエグザイルたちも含まれていた。例えば、カフエ・ヴォルテールという場所は、シュールレアリストたちのたまり場で、ジョイスもしばしば彼らのグループに属するものとみなされることがあったほどである。このグループの中には、トリスタン・ツアラやハンス・アルプらがいた。彼らは、戦後にパリに移ることになる。

彼らの、新しい、より充実した舞台をしつらえるために。ジョイスも結局そうなるのだが。

ツアラはユダヤ系のルーマニアの詩人で、チューリッヒに遊学中に第一次大戦にぶつかり、亡命した。この地の芸術家たちに働きかけてダダイズムの運動を起こすのが一九一六年である。彼自身の作品としては『アンチピリン氏の最初の天上の冒険』がある。また一八年には(二〇年にかけて七回発表される)『マニフェスト』の最初のものとなる『ダダの七つの宣言』を発表する。

一方、パリにおいては、アンドレ・ブルトン、ルイ・アラゴン、フィリップ・スーポーらがシュールレアリスムの活動を準備していた。三人は、雑誌『文学』を創刊し、翌年には、ツアラを迎えて、パリ・ダダイズム運動はその開花を見ることになった。